

更級

校と統合されて（一九七二年）治田小学校になる前の旧稲荷山小学校の校歌も載っていました。一番で「はてなく晴れた冠着の…」と冠着山の存在を強調しています。また稲荷山唱歌の六番でも冠着山を登場させています。

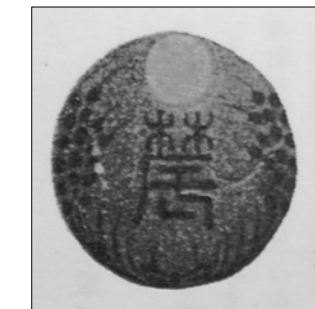
高原ではありません。それでも校歌には「更級の高原」と入ることになった理由をうかがわせる記述が「更級創立七十周年記念誌」にありました。当時の伊藤昌治校長先生が戦前の校歌が時代にくわ

市町村合併や生活経済圏の変化によって旧更級郡であっても、今では更級と意識している方は少なくなっていますが、その先代ぐらいまでは更級郡の人間であることを強く意識していたことをうかがわせる歌を見つけました。稲荷山唱歌と更級農業高校の校歌です。



ないため、創立五十周年記念事業の一つとして作ることになりました。長野県諏訪市出身で信濃毎日新聞社の信毎歌壇の選者であった五味保義さんに作詞を依頼しました。五味さんには学校に実際に来てもらい、川中

稲荷山唱歌
一、月にちなめる更級の 里の真中に位いする
我住む町は稲荷山 商う業を栄ゆなる
六、月の名に立つ姨捨の あなたにたてる冠着の
雲にそびゆる松見れば 富士の姿そしのぼるる



更級や姨捨をイメー
ジさせる言葉
を、校歌
の歌い出し
に置くこと
ろに、旺盛
な更級意識
がうかがえ
ます。

稲荷山で
最もにぎわいを呈し
ていた荒町通りから
は、冠着山が正面に
見えます（写真左）。



更級農業高校校歌
一、はてなく晴れた冠着の 大きな空が青空が
果立つ小鳥をのびるわれらをよんで
明日の日本を担う子 元気にそだつよはげむ
楽しい学校 稲荷山

その背景には、聖山周辺一帯を領域とする更級郡の農業振興の推進役を担った更級農高の、歴史的な証を盛り込んで後世に伝えたい、という思いがあったと思われる。

路と言えます。

▽校長の願い

次に更級農業高校の校歌です。なぜ、調べたかという、長野市の知人から「篠ノ井にあるのにとつて更級なのか」と聞かれたことがあったからです。

▽生徒が図案化

更級農高の校歌一番は「聖の山に雲立ちてここ更級の高原に」とその立地環境を示す言葉で始まっています。これは戦後の昭和三十年（一九五五）に

創立当時の校章（二枚組み写真右）には、もともと強い更級意識がうかがえます。初代校長の矢田鶴之助さんが考案したもので、デザイン化した「農」の周辺を稲穂で囲み、更にその上に月を配っています。矢田さんの意図について七十周年記念誌は、矢田校長が作詞した旧校歌の中の「川中島や更級の田毎の月の隠れなき」という歌詞に込めた思いを反映させたものではないかと解説しています。

篠ノ井にある更級農業高校



作られました。もともと更級農高は明治四十年（一九〇七）、旧更級郡塩崎村（現長野市塩崎地区）で開校したのですが、当時は既に現在の篠ノ井（旧更級郡篠ノ井町、現長野市篠ノ井）に校舎が移転していました。塩崎には山間地も含まれますが、篠ノ井は平地です。

戦後の新校歌の制定に先立つ昭和二十三年、校章も新しくすることになり、生徒から募集したそうです。二十点ほどの応募があり、「一年生の武井佳郎さん」の作品（二枚組み写真左）が選ばれました。「高」を開む菱形は更級の「更」を直線で図案化したもので、その上にはやはり稲穂が載っています。七十周年記念誌によると、「四方に卒業生を送り出し、それぞれの分野で力強く活躍してほしい」というのが武井さんの思いだったそうです。

更級郡の商都だった稲荷山

一番の歌詞で稲荷山を「月にちなめる更級の里の真中に位いする」とつたっています。「稲荷山四百念の歩み」が出版された一九七四年の時点では「今も歌われている」と記されています。名月の里であることへの強烈的な誇りを感じさせる文句です。

なぜ、稲荷山の人たちがそれだけ強く意識したかといえ、更級郡の商都だという自負があったためと思われる。戦国時代は稲荷山城下の城下町で千曲川に近く耕地の少ないところでした。江戸時代

になると、善光寺街道沿いの有力な宿場となります。そして江戸後期から明治にかけて商品経済が発達し人の行き来が盛んになってからは、当時の日本を代表する輸出品で最も換金効果の高かった繭や生糸をはじめとする農産物、商品の集散地となります。今もたくさん残る白壁の蔵造りの建物はそうした繁盛の証です。

明治半ば市町村制が施行されたとき（このシリーズの二回目で触れました）、更級郡は一町二十六村で構成されていました。その唯一の町が稲荷山

発行 二〇〇五年 九月十日

編集 さらしな堂

（代表・大谷善邦）

〒三八九・〇八一三

長野県千曲市大字若宮一八四六

（旧更級郡更級村）